



Title	子ども臨床研究部門
Citation	子ども発達臨床研究, 14, 120-121
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77548
Type	bulletin (other)
File Information	120-1882-1707-14.pdf



[Instructions for use](#)

子ども臨床研究部門

1. セミナー及び研究会

以下の子どもの心理臨床や特別支援教育に関わる講習会、ワークショップ、シンポジウムを行った。臨床と研究のための交流会は別に報告を掲載する (p.122)。

(1) 「臨床と研究のための交流会」

・第4回交流会

テーマ：ICF 情報把握・共有システムを活用した発達障害支援の実際

日時：7月19日(金) 19時～21時

話題1：「ICF 情報把握・共有システムを活用した学齢児の多領域連携支援」

桐田結佳 (札幌市中央小学校)

萬谷きみ子 (相談支援事業所なえぼん)

話題2：「ICF 情報把握・共有システムの社会実装研究」

安達潤 (子ども臨床部門)

・第5回交流会

テーマ：アセスメント事例から研究を考える

日時：2019年11月29日(金) 19時～21時

話題：「WISC-IV を適用した事例」「臨床サンプルの分析から」

岡田智 (子ども臨床研究部門)

(2) 北海道大学公開講座発達臨床セミナー

学外の臨床家、支援者向けに、2つの公開講座を行った。

・テーマ：WISC-IV による心理アセスメントの基礎を学ぶ

日時：4月20日、21日

内容：WISC-IV の実施法、解釈法、事例の分析など

講師：桂野文良 (学外研究員)、山下公司 (学外研究員)、橋本悟 (北海道済生会西小樽病院)、岡田智 (子ども臨床部門)

・テーマ：発達障害の当事者研究と自己理解支援

日時：11月17日

内容：通級指導での自己理解の支援や2Eの強みを生かした支援、また発達障害のある成人の公開当事者研究について。

講師：岡田克己 (仏向小学校)、森村美和子 (狛江第三小学校)、山本彩 (札幌学院大学)、いちこ、ST・KEN、ひろし (相談室ぼらりす)

(3) 特別支援教育士継続研究会全5回 (S.E.N.S 北海道支部会共催)

対象：教育・医療・福祉関係者、大学院生

参加者：20～30名

テーマ：心理検査アセスメント及び指導支援に関する事例検討会5回実施

日時：7月20日、9月1日、10月20日、11月24日、12月8日各2時間

2. ディスレクシア支援室

本支援室での相談・支援活動は、医療機関等で既に診断を受けている事例を対象とし、研究協力への同意の下に行っている。心理学的諸検査を実施し、その結果に基づいて心理・教育的な指導方法の提案・実施を行う。関あゆみ、室橋春光 (学外研究員)、橋本竜作 (学外研究員) の3名と博士課程院生で運営している。院生や支援者の研修としても位置付けており、「障害・臨床心理学総合講義 (学習障害)」の受講者 (前期4名、後期4名)、博士課程院生2名、教育医療関係者3名が参加した。本年度の参加者 (研究協力者) は小学1年生から中学生までの14名 (新規6名/再来8名)、支援・相談回数はこのべ78回 (1月末時点) であった。

8月10～11日には「ディスレクシア合宿」を行った。これは子どもへの学習支援、保護者への情報提供、子ども・保護者間の交流を目的とするものである。親子5組13名、スタッフ・大学院生14名、学部生3名が参加した。昨年度までに支援が終了となった高校生2名がサブスタッフとして参加した。

10月5日は金沢星稜大学の河野俊寛教授を講師とし、「学習に役立つ電子機器やアプリ」に関する当事者・保護者向け学習会を開催した。当事者8名、保護者9名が参加した。

3. RTI モデルを用いたひらがな音読支援

江別市教育委員会（2小学校）、士別市教育委員会（2小学校）と連携し、「T式ひらがな音読支援」による支援を行った。この支援法では、在籍する全ての1年生を対象として学期ごとにひらがな音読能力を評価し、その結果に基づいて21日間の読み練習を行う。さらに支援が必要な児童には2年時に週1回の個別指導を行う。学期毎の評価と読み練習・個別支援は各学校の教員が中心となり行い、センター研究員は教員への研修・助言、評価時の補助、3年生以降の対応についての助言を行った。

また、2016～2018年度の調査結果を学校別にまとめて教育委員会と各小学校に返し、小学校での指導における課題を検討する場を持った。

4. 発達障害の子どもを中心としたグループ活動及び相談アセスメント支援

H31年度は就学前の子供を対象とした実行機能及び社会情動発達に焦点を当てた幼児グループのフォローアップ活動を2回行った。参加スタッフは、岡田智、愛下啓恵（札幌国際大学）、難波友里（札幌市保健センター心理士）、岡田博子（同左）、石崎滉介（児童デイサービス、えりく）、江本優衣（教育学院）、他6名の学生スタッフである。これらの活動は、院生・学生には発達障害援助実習、発達心理学実習、障害・臨床心理学総合講義の授業としても位置づいた。夏の活動では、共立女子大学家政学部児童学科教授安田悟（児童造形）とそのゼミ生9名も参加し、造形と遊びのサマースクールを行った。

また、科学研究費補助金「発達障害特性の影響因を加味した知能検査解釈の構築」の研究の一環として、地域の発達アセスメントのニーズのある

幼児から学齢児とその保護者の相談を受け、アセスメント及び相談、幼稚園や小学校へのコンサルテーションを行った。12件、合計24回の相談支援をおこなった。また、小樽市潮見台小学校にて、桂野文良氏と通級児童、その保護者の協力を得て、WPPSI-IIIのデータ収集を行った。

5. 高機能広汎性発達障害の子ども・青年・成人の本人活動

北海道高機能広汎性発達障害児者親の会札幌支部との連携協力により、高機能広汎性発達障害の子ども・青年・成人の本人活動を、学生ボランティア、院生ボランティアが参加する形で6月、7月、8月、10月、11月、12月の計6回実施した。6月はセンターでの調理企画、7月はモエレ沼への外出企画、8月はセンター泊の1泊2日のキャンプ企画、10月はハロウィーン企画、11月は外出企画でボーリング、12月はクリスマス会を実施した。活動には、北海道教育大学札幌校の特別支援教育専攻の准教授及び学生、さらに市内の発達障害支援医療機関に勤める心理師も参加している。6回の参加延人数はメンバー（当事者）61名、ボラ学生・院生約65名であった。毎回、メンバー・ボラともに10名前後が参加している。活動内容は、レクリエーション中心だが、今年度は、活動打合せの事前ミーティングを活動日の約3週間前に開催し、その場に高校生以上のメンバーも参加して、ボラとメンバーが協働して活動を計画する取り組みを導入した。また今年度は小学生のメンバーも増え、幅広い年齢の当事者とかかわれる場ともなっている。当活動では本人活動に並行して、親部会の茶話会も実施されており、学生および院生の希望者は親部会にも参加して、保護者の生の声に接する機会も持つことができている。発達障害援助実習としても機能し、毎回の活動後の反省会では、センター研究員のディレクターによる支援実践のアドバイスも受けることができ、実践的な教育と臨床の視点を積むことができている。